

台湾の歴史教科書における日本認識の一考察

『歴史』と『認識台湾』を中心に

張 原銘*

台湾では、1987年に戒厳令が解除された後、民主化と本土化の動きが進んだ。それに伴って学校における歴史教育も、国民党政権による中国史を中心とする記述から、台湾を中心とする本土化および郷土教育へと方針転換された。具体的な動きとして、1997年9月の新学期から、台湾全土の中学校（719校）では、1年生全員が『認識台湾』という新しい歴史教科書を使って、台湾の歴史を学習することになった。なかでも日本統治時代については、『認識台湾』の歴史編（他に地理編・社会編）にて詳細かつ具体的に書かれている。従来の『歴史』と大きく異なる内容のこの教科書は、出版直後から台湾で大きな話題を呼んだ。日本でも『認識台湾』は「過去の克服」と「歴史的和解」につながる日台歴史観刷新への第一歩だとして、歴史学、社会学などの領域で注目されている。したがって本稿は、台湾の旧教科書『歴史』と新教科書『認識台湾』を取り上げて、両教科書における日本に関する記述、およびそこで構築されている日本像について比較検討することを目的とする。第1、2章では『歴史』と『認識台湾』におけるそれぞれの日本像の特徴を分析する。第3章では、両教科書に見られる日本像の差異を比較し、対日認識が変化するに至った背景を考察する。筆者は特にこの比較に際し、「省籍」と「世代」が対日認識の差異に影響を与えていると考える。本稿を台湾におけるポストコロニアル研究、さらには日台関係の新しい段階への布石として位置づけたい。

キーワード：『歴史』、『認識台湾』、日本認識、省籍、世代、ポストコロニアル

目次

はじめに

1. 旧教科書『歴史』における日本像
 2. 新教科書『認識台湾』における日本像
 3. 両教科書における対日認識形成の歴史的背景
- おわりに

はじめに

1967年から台湾の小・中学校で実施されてきた義務教育課程は、中国大陸の歴史、地理の学習が中心で、長期にわたって自国台湾の歴史、地理、文化などの学習は軽視されてきた。これは中国大陸から撤退してきた国民党政権による中国中心の教育方針の結果であった。このことは、戦後に教育を受けてきた人々に、台湾に対

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

する理解や興味を欠如させ、現代の国民として備えなくてはならない基本的な共通認識やアイデンティティの育成を困難たらしめてきたのである。

筆者も戦後に教育を受けてきた世代であり、中学校の義務教育を受けた時期（1981 - 84年）は、日台国交断絶後に国民政府が中華民族精神を強調した、徹底的な反日教育期であった。学校で教えられた「日本」は、中国侵略とそれに対する国民党軍の抗日が中心であった。そのため、日本による台湾統治に関する知識は、学校で全く教えられなかった。日本に留学し、日本語で書かれた台湾の近代史を学習した後、それまで認識してきた「日本」とは大きな差があることに気付き、歴史教育が学生に直接与えた影響の大切さと重みを改めて考えさせられた。

一方、この十数年来、台湾を取り巻く国内外の情勢の変化及び政治的民主化の進展により、台湾の本土意識が急速に高まってきた。そして、これまでの中国史を中心とする教育方針が疑問視され始め、教育界の有識者は、再三にわたって本国史教科書において台湾史の分量を増やし、中学生が中国史の発展を熟知するのみならず、同時に台湾の歴史的過程を学ぶようにしなければならないと主張するようになった。

このような社会からの要求に直面して、台湾の教育当局は1993年に「国民中学課程標準改訂委員会」（「課程標準」は日本の学習指導要領に相当）を招集・開会し、「台湾に立脚し、中国大陆を心に思い、世界に目を向ける」という原則に基づいた「認識台湾」国民中学の第1学年よりという科目を設けることにした。科目の内容は歴史、地理、社会の3分野に分かれており、委員会の招集から4年の編集作業を経て、1997年に台湾全土の中学校に導入された。

『認識台湾』歴史篇では、1885年から1945年までの日本植民統治期に関する歴史的事実が教科書120頁の内31頁にもわたって詳細に叙述されていることから、台湾の歴史教育がこの時代の日本認識をいかに重視しているかが推察できる。さらに内容的には客観的史実に基づいた立場から台湾における脱日本植民統治が再評価されている。これは、まさに日本へのポストコロニアル的な考え方が歴史教育の場において具体化されつつあることの一事例といえる。

本稿は、台湾の旧教科書『歴史』と新教科書『認識台湾』を取り上げて、両教科書における日本に関する記述、およびそこで構築されている日本像について比較検討することを目的とする。第1、2章では『歴史』と『認識台湾』におけるそれぞれの日本像の特徴を分析する。第3章では、両教科書に見られる日本像の差異を比較し、対日認識が変化するに至った背景を考察する。

以下第1章では、まず、1949年国民党政権が台湾に移動してから97年まで、各時代における旧教科書『歴史』¹⁾での日本像の変遷を俯瞰した上で、さらに『認識台湾』²⁾が出版される直前の1989 - 97年版の『歴史』の中に見られる日本に対する歴史認識の形成及びその論理構造について分析していきたい。

1. 旧教科書『歴史』における日本像

(1) 各時代における改訂された『歴史』での日本像の変遷

1895年から1945年まで、台湾は日本の植民統治下におかれた。1949年に国民党政権は中国での内戦に敗れ、台湾に撤退し、それ以後台湾を統治してきた。1972年日本は中華人民共

和国と国交正常化を実現するとともに、台湾と断交した。その一方で、国民党政府が中国大陸で15年間抗日戦争を体験したことも事実であった。こうした歴史的背景の下で、台湾の学校における歴史教育では日本をいかに教えているのか、また時代の変化及び国内外の情勢変化によってその記述にどのような変化がみられるのかをまず把握したい。

『歴史』は1949 - 97年の間に11回改訂されている。そして、改訂にともなう「日本像」の変化は主として以下の3つの時期に区分できる。前期は終戦後から日台国交断絶までの日台友好関係重視期、中期は1972年日台国交断絶後から88年李登輝政権成立までの中華民族精神強調期、後期は80年代後半から今日までの客観史実への転換期である。以下では、この各時期の日本像の特徴を検討する。

(a) 日台友好関係重視期（1949 - 71年）

国民党政権が台湾に撤退した後、1949 - 51年版の中学歴史教科書で見られる日本像の特徴は、抗日戦争の内容が中心で、対日記述の総字数が最も多い点である³⁾。特に第二次世界大戦の時期を中心とする20世紀前半に、日本のアジア侵略と国民党の日本軍侵略抵抗史が詳細に記述されている。例えば、「九・一八事変」は4頁を用いて説明し、「太平洋戦争」については9頁にわたって記述されている⁴⁾。

1953年 - 55年版の中学歴史教科書では、対日記述の量が減少したが、対日記述の項目数は逆に増加した。古代史から戦後日本の責任問題まで幅広く叙述されたものの、近代日本の対外侵略と抗日の記述については、各項目での記述字数が減少した。このことは49年国民党政府が台湾に移動して、日本との外交関係を重視し

たことがその背景にあると言えるだろう。

1962年台湾の教育部（日本の文部科学省に相当）は中学校に対して「改訂課程標準」を公布し、63年から65年まで歴史教科書の改訂が進められた。この教科書改訂の方針は「民族精神教育の強化」であり、対日記述は字数が減少した⁵⁾。69 - 71年版では、対日記述の総字数が若干減少し、対日の姿勢に大きな変化が見られるようになった。古代と近代の日中戦争と抗日に関する字数の割合が大きくなり、逆に古代と近代日本、日中交流と戦後日本に関する記述の割合が減少した⁶⁾。

以上、1949年から71年までの22年間で歴史教科書に見られる対日記述が全体的に減少した。60年代末から国際環境が台湾にとって厳しくなり、中国を重視する傾向が強まったことで、国民党政府が孤立を懸念して「民族精神の強化」を教育で重視した結果だと言える。

(b) 中華民族精神強調期（1972 - 87年）

72年には再び「中学課程標準」の改訂が發布された。この課程標準の改訂方針は、特に民族精神の強化と愛国心を強調したものである。73 - 75年版の対日記述の特徴としては、総字数が従来と同様に減少する傾向が見られるが、内容は複雑になってくる。つまり、近代における日本の侵略と抗日記述の割合が減少した一方、近代日中交流の記述における割合が大きくなり増加した。さらに、「南京大虐殺」が初めて中学の教科書に掲載されたことから、厳しく批判的な対日姿勢がうかがえる。他方、戦後日本についての記述は、各国との対日講和条約だけであり、国民党政府による対日政策についての記述部分が消去された⁷⁾。

1981 - 83年版の対日記述は、抗日戦争期の国

国民党政府軍による正面戦場の戦役についての部分が少なくなり、長沙会戦と湘北会戦などの大戦役についての言及も姿を消した。こうして国民党政府の功績を称える姿勢が抑制された⁸⁾。

84年から91年までには、4回にわたって教科書が改訂された。ここでひとつ注目すべきは、70年代までの中学歴史教科書でほとんど言及されていなかった日本の台湾侵略と台湾人の反抗が83年以降の教科書にサブタイトルをつけて登場したことである。例えば、日清戦争以後の台湾植民統治期の日本総督府による虐殺、略奪及び台湾青年に対する高等教育の差別政策などが強調されている。これは台湾における歴史教育の中で次第に「台湾史」を重視するようになる第一歩であった。

(c) 客観史実への転換期（1988 - 97年）

89年 - 91年版の教科書で見られる対日記述の字数は大きく減少し、各項目についての記述もさらに縮小する傾向が見られた。例えば「南京大虐殺」と他の戦役は、ともに簡単に記述されるようになった。さらに、近代日本については批判だけではなく、清朝末期の中国人による日本留学が中国の近代化に良い影響を与えたとの肯定的な記述も見られるようになる。また、70年代初期の台湾の国連脱退と日中国交正常化による台湾への影響も記述されるようになった⁹⁾。

92年から97年に至るまで、教科書の記述がますます簡略化され、多くの内容は写真を添付して、生き生きとした史実を表現するようになった。日本についての記述の特徴は、近代における日中戦争の部分の割合が増加し、日中交流及び戦後日本の記述が減少した点である。対日記述の基本的立場は依然として批判的な方針を

採っているものの、抗日戦争における具体的な戦役と日本植民統治などの記述はより簡略化されるようになり、史実だけ述べるといった客観性が出てくる¹⁰⁾。

以上1988年から97年までの歴史教科書で見られる日本についての記述は、全体的に近代の日本についての記述が多い。また「自国史」は中国史が中心で、日本の対中侵略歴史及び抗日の部分がいずれの時期の歴史教科書でも絶対多数を占めているのである。

以下では、さらに1992 - 97年版の『歴史』（『認識台湾』への移行直前の歴史教科書）で見られる日本に関する記述を抽出して検討していきたい。

(2) 『歴史』（1992 - 1997年版）で見られる日本像

『歴史』（1992 - 97年版）は、中華民族の構成と領土の変化、上古時代（春秋戦国時代）、中古時代（魏晉南北朝及び随・唐時代）についての第1冊、近古時代（宋・元・明・清の時代）についての第2冊。近・現代（アヘン戦争以降）についての第3冊、外国史についての第4冊と第5冊という計5冊に分かれている。また、生徒は第1学年で第1冊と第2冊を、第2学年で第3冊と第4冊を、第3学年で第5冊を学ぶ。

次節では、第3冊の第23章3節¹¹⁾に描かれている日本をとり上げ、そこから浮かびあがる日本像を分析及び検討していく。

(a) 日本の侵略に対する抵抗

日本多年來一直處心積慮、陰謀滅亡我國。民國二十九年九月十八日、日本關東軍自行炸毀瀋陽附近一段鐵路、誣說是中國軍隊所破壞、于是炮擊瀋陽、于次晨占領全城、是為「九・一八事變」。接

着、日軍相繼進占東北各重要城市。我東北義勇軍雖奮起抵抗，但寡不敵衆，東三省便在二十一年初完全淪陷¹²⁾。

日本は長年にわたってわが国を滅亡させようと苦心して計画を立てている。民国20年（1931年）9月18日、日本の関東軍が自ら瀋陽付近の一部の鉄道を爆破したにもかかわらず、中国軍が行った、と故意に事実を曲げて発表したのである。そして、瀋陽を攻撃した次の日に瀋陽を占領した。この事件は歴史上「9・18事変」と呼ばれている。又、日本軍が相次いで東北の各主要な都市を占領したのに伴って、わが東北義勇軍が奮起し、侵略に抵抗したが、日本軍の多勢にかなわなかったため東三省は民国21年（1932年）初めに完全に攻め落とされてしまったのである。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

(b) 国民党軍による対日戦争

民國二十六年七月七日、日軍在北平附近宛平縣蘆溝橋附近舉行演習、借口一名士兵失踪、要求進入縣城盤查、爲我駐軍拒絕。日軍乃炮轟縣城、我軍守土有責、即于還擊。史稱「蘆溝橋事變」。七月底、日軍又猛攻北平、天津。（略）全面抗戰由是展開¹³⁾。

民国26年（1937年）7月7日、日本軍が北京近郊の「宛平県蘆溝橋」付近で軍事演習を行った際、一名の兵士が行方不明だという理由で城内に入り取り調べることを要求した。我が駐屯軍に拒否された日本軍はその都市を攻撃し、我が軍は即座に反撃した。これを歴史上「蘆溝橋事変」と呼んでいる。7月末、日本軍がさらに北京、天津を猛烈に攻撃し、（略）全面戦争の展開に至った。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

(c) 「日本軍の暴行」

上海在民國二十六年十一月淪陷後、國民政府遷都重慶。十二月、日軍攻陷南京、竟縱容官兵肆行強奪、放火、奸淫、並進行大規模屠殺、我無辜同

胞至少三十萬人遇害史稱「南京大屠殺」。更爲殘酷的、還利用中國人試驗細菌。這不僅是中華民族的浩劫也是人類史上的一大慘劇¹⁴⁾。

民国26年（1937年）11月、上海が占領された後、国民党政府の首都は重慶に遷移された。

12月、日本軍は南京を攻め落とした後、兵士の強奪、放火、強姦を放置したまま、更に大規模の虐殺を起こし、我々罪のない同胞らは少なくとも30万人が殺害された。これを歴史上「南京大屠殺」と呼んでいる。更に残酷なのは、中国人を使って人体細菌試験をしたことである。これは、中華民族の大災難だけでなく、人類史上類の無い大惨事であったともいえる。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

(d) 抗戦時期の内政と外交

傀儡政権：抗戦初期、日本先後在華北、華中成立傀儡政権、但作用不大。後乃利用意志薄弱的汪精衛供其驅使。29年、日本扶植汪精衛在南京成立偽《國民政府》。抗戦勝利後、這批參與汪偽政權的賣國漢奸、都先後遭到國法的制裁¹⁵⁾。

日本の傀儡政権：抗日戦争の初期、日本は前後して華北、華中で傀儡政権を創立したが、影響は大きくなかった。意志薄弱的汪精衛を利用した。民国29年（1940年）、日本は汪精衛を育て上げて南京で《国民政府》を創立した。抗日戦争成功後に、汪をはじめ、この偽政権に参与した売国奴達が、前後して国家による法律の制裁を受けた。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

(e) 日本の無条件降伏

民國三十四年五月、德國投降、日本頓感孤立。八月、美國以原子彈投炸日本國土、日本舉國震驚乃宣布無条件投降。我國對日抗戰及第二次世界大戰、遂告結束¹⁶⁾。

民国34年（1945年）5月、ドイツが投降し、日本は孤立を痛感していた。8月、アメリカが原子爆弾を日本に投下し、日本中を震撼させ、そこで、日本は無条件投降を宣言した。わが国の対日抗

戦と第二次世界大戦がこの時点で終結したのである。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

学生の対日抗戦への理解を深める目的で、第3節の最後に「研究と討論」という2つの問題提起が示されている。1つ目は、「抗日戦争の軍事進展は概略的にどのような2つの時期に分けられるのか。さらに2つの時期における作戦の指導方針はそれぞれどのように異なっているのかについて討論せよ。」であり、2つ目は、「不平等条約が廃止に至った過程、およびカイロ宣言の意義について討論せよ¹⁷⁾」であった。

1992 - 97年版『歴史』第3冊の第23章3節における対日記述では1931年日本の関東軍が瀋陽で引き起した「9.18事変」をはじめ、日本軍による中国との戦争史が記述されはじめた。37年の「盧溝橋事変」の後、日本軍の北京、天津攻撃によって、中日全面戦争が展開されたことや、同年の12月に、南京が日本軍に攻め落とされた後の「南京大虐殺」を写真付きで、紹介するとともに、犠牲者30万人の数まで言及しているほか、さらに日本軍による中国人を使つての人体細菌試験についても記述されていた。さらに、満州と南京で成立した傀儡政権を批判した上で、アメリカの原始爆弾の投下による日本の無条件投降宣言についても記されている。

これまで見てきた通り、台湾の中学校における歴史教育の基本方針は、中国史・国民党史を中心に編集されたものであった。なぜなら、両蔣時代（蒋介石、蔣経国を指す）の国民政権が、実質的に台湾で統治権を実施しているにもかかわらず、中国の正式な統治者として一日でも早く共産政権を倒し、中国の統治権を取り戻すという政策に基づいていたからである。従って、台湾の歴史は中国史の中での一地方史に過ぎな

いと考えられ、その地方史を語る必要性は『認識台湾』が導入されるまで無視されてきたと言えるのである。そのため、かつて中国大陆で15年間抗日戦争の体験をしてきた国民党政府は、日本を帝国主義によって中国を侵略する姿として、つまり中華民族の敵であると位置付けてきたのである。

2. 新教科書『認識台湾』にある日本像

(1) 『認識台湾』の出版経過

1987年に蔣経国自ら台湾における戒厳令を解除したことによって台湾と中国の緊張関係が次第に緩和され、台湾政治における民主化と本土化の動きも始動しはじめた。88年の李登輝政権の発足によって、平和的で民主的な方法で国民党の一党専制体制から多党政治へ移り、言論・出版の自由が保障されるようになった。このような環境が整ったことにより、歴史教科書における中国大陆を中心とした国民党の反日教育が見直され始めたのである。

こうした流れに沿うようにして台湾教育界の有識者は、母語教育・郷土教育をはじめ、本国史教科書における台湾史の分量を増すことによって、中学生が中国史の発展を熟知するのみならず、同時に台湾史の変遷過程を理解する機会を得るべきであると訴えてきた。

1993年、当時野党であった民進党による「台湾における各地域への再認識運動」への強い要望によって、教育当局は「国民中学課程標準修訂委員会」（「課程標準」は日本の学習指導要領に相当）を招集・開会した。そこで「台湾に立脚、中国大陆を心に思い、世界に目を向ける」という原則に基づき、中学校の教育カリキュラムに台湾に関する科目を設置することが決

定された。具体的には国民中学の第一学年に「認識台湾」（「台湾を知る」）という科目を設け、歴史、地理、社会の3分野を毎週3コマずつ設け、従来の歴史・地理・公民と道徳の3科目に置き換えると決議した。こうして『認識台湾』歴史編は1997年9月から正式に台湾全土の中学校で使われるようになったのである¹⁸⁾。

（2）『認識台湾』における日本統治期に関する記述

『認識台湾』は、戦後50年来台湾の歴史が初めて国民中学校の社会科で正式な教科科目となったものであり、国民中学の歴史教育の改革において画期的な意義を持つ。これは、台湾の国民中学における歴史教育がもはや、単に中国の歴史を注入するのではなく、生徒が実際に暮らす台湾独自の歴史を重視し始めたことの表れである。

そこで描がられている新たな日本像には、旧教科書『歴史』と全く異なる視点から台湾植民統治期の日本を再評価し、捉えていくという姿勢がはっきりとみえるのである。以下では、『認識台湾』歴史篇の全体像¹⁹⁾を踏まえた上で、さらに第7章「日本による植民統治期の政治と経済」と第8章「日本による植民統治期の教育・学術と社会」における対日記述を検討していきたい。

（a）『認識台湾』第7章「日本による植民統治期の政治と経済」

（a）- 差別と皇民化

一八九六年、日本政府以臺灣為新取得之植民地、采不平等待遇、歧視臺灣人。一九三七年中日戦争爆發後、日本為因應戰爭的需要、于是在臺灣推動（皇民化運動）鼓勵常用日語、養成日式生活習慣、改從日姓及供奉日本神祇等、企圖使臺灣人也具有日本國民的愛國心和犧牲精神²⁰⁾。

1896年、日本政府は台湾を新たに取得し植民地となし、不平等待遇を行い、台湾人を差別した。1937年、日中戦争が勃発すると、日本は戦争の需要に応じるため、台湾で「皇民化運動」を推進し、日本語の常用、日本式的生活習慣の養成、そして日本人の姓や日本の神の祭事などへの改変を奨励し、台湾人にも日本国民としての愛国心と犠牲的精神を具えさせることを企図した。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

（a）- 典型的な警察政治

日本植民統治初期、總督府為了鎮壓武裝抗日勢力と維持治安、不斷擴充警力和警察的職權、而致無所不管。關於警察的職權如下：

- i、執行法律和維護公共秩序。例如監視公共集會、審理小型案、取締吸食鴉片、管理當舖等。
- ii、協助地方政府處理一般行政事務。例如協助宣傳政令、收稅、管理戶籍、普查戶口等。
- iii、管理原住民部落²¹⁾。

日本植民地の初期、總督府は武裝抗日の勢力の鎮壓と治安維持のため、不斷に警察の權力を拡大し、最後は管轄しないものはないと言えるまでにした。実際に当時の警察の仕事は、大きく分けて3つある。

- i 法律の実行と公共秩序を維持すること。例えば、公共集会の監視、小さい刑案の審判、アヘン吸引者への取り締まり、質屋の管理など。
- ii 地方政府の一般的行政事務の処理に助力する。例えば、政令宣伝への助力、税金を納める、戸籍管理、調査など。
- iii 原住民部落の管理。（筆者訳筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

（a）- 台湾籍日本兵

大量招募臺人從軍、最後甚至實施徵兵制度、結果、臺籍日本兵總數多達20餘萬人²²⁾。

多くの台湾人が募集されて従軍し、最後は徴兵制まで実施された。台湾籍日本兵の総数は20万余りに達する。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

(a)- 経済政策

日本統治植民初期，總督府爲了配合日本的經濟發展，積極展開各項經濟改革和建設工作²³⁾。

日本植民統治の初期，總督府は日本の經濟發展に歩調を合わせるため，積極的に各種の經濟の改革と建設を展開した。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

(a)- 農業改革

興修水利工程，使灌溉面積大增，其中最著名的是八田與一設計建造的嘉南大圳灌溉面積達十五萬甲²⁴⁾。

水利工事を行い，耕地灌溉面積を大きく増加させた。その中で最も有名なのが八田與一が設計，建造した「嘉南大土川」で，灌溉面積は15万ヘクタールにも達した。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

次に，第8章の「日本による統治時期の教育・学術と社会」は，「日本語教育」と「社会の変遷にともなう近代的生活様式」という2項目に分かれている。

(b)『認識台湾』の第8章「日本による植民統治期の教育・学術と社会」

(b) - 日本語教育

「日本植民地統治末期、会日本語の人口超過百分の七十五。儘管如此、日語並未成為台湾人的生活言語、只不過使台湾成為一個「双語並用」的社会。台湾人始終將日語看成外國語文、並不因為會日語而被同化；日語反而成為台湾人吸收現代知識的主要工具、促進台湾社会的現代化」²⁵⁾。

日本による植民地統治末期，日本語が分かる人口は75%を超えていた。だが，日本語は台湾人の生活言語にならず，只台湾を1つの「両言語社会」にさせた。台湾人は結局日本語を1つの外国語としたのであり，日本語の学習によって日本人に同

化することはなかった。日本語は台湾人が現代知識を吸収するための主な道具になり，台湾社会の現代化を促進したのである。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

「社会の変遷にともなう近代的生活様式」では，日本による統治期に台湾社会において3つの社会的な風俗習慣が大きく変化したと記述されている。1つ目は，纏足と辮髪の全面廃止運動，2つ目は，時間厳守精神の確立，3つ目は，近代的衛生觀念の樹立である。

以下では，当時の台湾にとって近代化を象徴する，この3つの社会変化をさらに検証していく。

(b)- 纏足と辮髪の廃止運動

日本殖民主義之初、纏足、辮髪及吸食鴉片，被總督府看作是臺灣社會三大陋習。總督府采漸禁政策，對於纏足和辮髪則透過學校教育或報章雜誌的宣導，鼓勵臺人放足斷髮。（略）影響所及女子生產力大爲增加，有助於經濟發展；產生易服改裝風氣，新服飾、鞋帽業勃興；審美觀念也漸改變不再以纏足爲風尚²⁶⁾。

日本統治の始めに，纏足と弁髪，そして阿片の吸飲は，總督府によって台湾社会の三大陋習と見なされた。總督府は漸禁政策を採用し，纏足と弁髪については学校教育，或いは新聞，雑誌における宣伝指導を通じて，台湾人にそれらの追放を奨励した。（略）この影響で，女性による生産力は大きく増加し，經濟發展への一助となった。服装を改める氣運が生まれ，新しい服装，靴，帽子の産業が勃興した。審美觀も次第に変化し，再び纏足が尊ばれることは無くなった。（筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

(b)- 時間厳守精神の確立

總督府將星期制和標準時間制度引進臺灣，機關、學校、工廠等制定作息規律，嚴格要求員工、學生遵守，例如上下班對時搖鈴，必須準時簽到。

（略）1921年起，比照日本國內，規定每年6月10日爲「時的紀念日」，透過機關，團體等，舉辦演講、游行或音樂會，張貼海報，散發傳單等，宣傳時間的重要性，以期培養準時、守時、惜時的精神使社會大眾在日常生活中養成時間標準化和守時的觀念²⁷。

總督府は週制度と標準時間制度を台湾に導入し，官庁，学校，工場なども就業と休息の規則を設定し，職員や工員，学生に遵守を厳しく要求した。例えば退出勤に際しては時間に照らして鐘を鳴らし，必ず時間通りに出勤簿に署名しなければならなかった。（略）1921年からは日本国内にあわせ，毎年6月10日を「時の記念日」と定め，官庁や団体などを通じて講演会やパレード，あるいは音楽会を行い，ポスターを張り，ピラを配るなど，時間的重要性を宣伝し，時間に正確であり，時間を守り，時間を惜しむ精神の養成を期し，社会の大眾に日常生活における時間の標準化と時間厳守の觀念を養わせた。（筆者訳筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

(b)- 近代衛生觀念の樹立

日本殖民統治之初，總督府就積極建立近代公共衛生和醫療制度；建造自來水工程，供應城市居民幹淨的飲水；修築城市地下排水工程。（略）實施預防注射、隔離消毒、捕鼠活動、強制驗血和給藥等防疫工作。因此，有效地防治鼠疫、瘧疾、霍亂、傷寒等傳染病，并且改變臺人的醫療衛生觀念和習慣²⁸。

總督府は日本殖民統治の初め，水道を敷設して都市住民にきれいな水を供給し，都市の地下排水工事をを行い，（略）更に，予防注射，隔離消毒，鼠捕り活動，強制採血，そして薬の供給といった防疫事業を実施するなど，近代的な公衆衛生と医療制度の確立を積極的に行った。これにより，ペスト，マラリア，コレラ，腸チフスなどの伝染病の予防と治療が有効に行われ，なおかつ台湾人の医療衛生に対する觀念と習慣が改められた。（筆者訳筆者訳：かっこ内は筆者によるもの）

これら二章には，日本による統治時代の史実をより理解するため，各節ごとに「研究と討論」の項目がある。たとえば，本県，市内における抗日の事跡と史跡を調べる等の課題である。生徒は，学区内で「保正」や「甲長」（「保正」と「甲長」は警察の仕事を手伝う人）であった人々，またはその家族を尋ねて当時の体験を聞く。または，学区内で，日本時代に設立された学校を調べる²⁹。

概して，『認識台湾』における日本像の特徴については，以下のようなことが言える。『認識台湾』の歴史区分は台湾を中心に先史時代（5万年前～），國際競争時代（1600年～），鄭氏統治時代（1662年～），清朝領有時代前期（1683年～），清朝領有時代後期（1853年～），日本殖民統治時代（1895年～）及び中華民國統治時代（1945年～）の7つからなり，先史を除く6つの時代で日本について言及している。清朝統治時代後期までにおいては，対日記述は豊臣秀吉による台湾での戦争，及び16世紀末の日本による琉球・台湾侵略以外はすべて貿易交流についてである³⁰。

日本による殖民統治の評価については，第7章と第8章あわせて6節をかけて記述されている。第7章は「日本殖民地時期の政治と経済」と題し，日清戦争後に日本が台湾を領有し，台湾總督府を設立して，51年間の殖民地統治を展開したことについて書かれている。その概要は一方で，日本は台湾人の武力反抗を強力に鎮圧しながら，他方では，總督専制の統治体制を確立し，警察と保甲制度を併用しながら，効果的に台湾社会をコントロールしたというものである。経済面では，前期において「農業台湾，工業日本」という政策のもとで總督府による農業改革に力を入れ，台湾を日本が華南と南洋を

侵略する上での補給基地とした。後期は工業化を推進し、台湾を日本の華南、南洋侵略のための補給基地とした記述である。

第8章は「日本による統治時期の教育・学術と社会」と題して、以下3つの事柄が書かれている。第一に、植民時代の教育発展について、初等教育施設である公学校が台湾社会で普及したことによって、台湾社会は「学校」を通じて世界の近代的文明システムに入ったと近代化への貢献を評価している。第二に、医療や衛生環境の改善によって台湾人口の激増、清朝時代に伝わってきた風俗習慣である纏足・弁髪への撤廃政策、時間厳守、遵法、近代的衛生観念の養成などが紹介されている。第三に、1920年代からは新知識人たちが10年余りの長きにわたる社会運動を盛り上げ、政治改革や農民、労働者の待遇改善を要求し、同時に民衆の啓蒙運動を行ったと述べられている。

3. 両教科書における対日認識形成の歴史的背景

(1) 「省籍」による対日認識の違い

これまで述べてきたように、両教科書は全く異なる立場から日本を捉えている。『歴史』では、基本的に国民党軍が中国大陸で経験した対日抗戦史と日本帝国主義による中国侵略の姿を中心に、中華民族という立場から対日認識が形成されている。これに対して、『認識台湾』では、日本による台湾植民統治を中心に、抗日運動をはじめ、政治、経済、教育、社会等に関して、台湾を主体として描かれている。さらに、台湾の近代化に貢献したことや植民地主義によって台湾の資源を搾取したという多様な立場から対日認識が形成されている。そこで本章では、両教科書に反映されている対日観の論理構造を

「省籍」と「世代」の2点から論じていく。

教科書に反映された異なる対日観の背後には、最も強い要素として「省籍」による対日体験の違いが考えられる。台湾の民族構成は基本的に本省人、外省人、客家人、先住民という4つのグループに分けられる。ここで注目すべきは、第一世代の本省人と外相人が体験した「日本」は全く異なっていたという点である。そこで、まず本省人と外省人の定義を明確に示しておく必要があるだろう。

終戦の翌年（1946年）1月台湾の国府行政院訓令により、台湾の住民は、「1945年10月25日より中華民國の国籍を回復した」ともとされた。この訓令で中華民國へ国籍を回復した男性及びその子孫が本省人であり、元來中華民國国籍を所有し、かつ（中国大陸から来た）台湾に居住する男性及びその子孫が外省人ということになる。日本統治下の「本島人」は中華民國統治下の「本省人」となったわけである。本省人と外省人の関係は、法的にはここからスタートしている³¹⁾。

この定義のもとに、一世の本省人と外省人が体験した日本の違いについて、陳光興は『世界』で次のように述べている。

日本による台湾植民地統治期の歴史を振り返って、再考察する場合、多くの一世代の本省人は「進歩的近代化の日本」と外省人から見た「中国を侵略した日本鬼」という二つの受け止め方をしていると考えられるのである。本省人と外省人における集団的情緒構造において、主観的なレベルでは2つの軸線は平行して展開し、決して交わることがない。しかし、客観的な歴史構造においては、この2つの軸線が交わる場所、つまり台湾に生きているこの2つの情緒構造の差異は日本のイメージに対する落差を媒介としており、この差異が現在の衝突や矛盾の情緒的基盤となっている³²⁾。

台湾に渡ってきた外省人の「日本」に対する記憶は、1931年の満州事変から1937年の盧溝橋事件へ、そこから始まる悲壮な抗日戦争に占められていると考えられる。1945年の日本の降服宣言は、つまりは「中国勝利」のイメージであり、「日本」に対しては何らプラスのイメージを持たないと言っても過言ではない。反日といった感情は、疑いえない基本的な「中国」の現代的民族主体のキーポイントとなっており、国民党から共産党まで、この点は外省人と中国人の一致するところだと言えよう。外省人は、中国大陸にいた期間の抗日経験によって、本省人が日本植民期で体験してきた近代化とそれがもたらした高度な文明性、そして被植民者としての政治的、経済的に蒙った苦難の体験を実感できない。

一方、台湾における本省人の「日本」に対する記憶は複雑である。1885年から1945年まで、台湾の近代化に貢献したことと植民地主義によって台湾の資源を搾取したという両極のイメージをもっている。正に日本に対して共有する愛憎や思い入れが分かち難く結びついているのである。

逆に本省人は、外省人が冷戦によって強制的に移動させられた苦しい経験を理解しにくい。つまり、本省人の意識構造の中では、国民党は依然として植民地主義による冷戦亡命政権であり、外省人が敗戦の民衆であるということを感じて実感できないのである。

このような生きた歴史経験と記憶は、構造において根本的に分岐し、日本の植民地主義に対する二つの全く違った心理状態、情緒構造を作り出してしまふ。日本への認識の違いと落差は、両方の教科書ではっきりと観察ができ、現在本省人と外省人の対立的な情緒の基礎に、お互いに理解しあ

えない主たる原因となっている。

今後は両者とも、互いに自己の苦難の経験を置き換えさえすれば、相手の悲哀を理解しうる可能性がある。冷戦と植民地主義にかかわる認識が引っ張り合いをしていることから免れることが出来たら、台湾社会においての省籍をめぐる問題解決の糸口が見えてくるだろう。

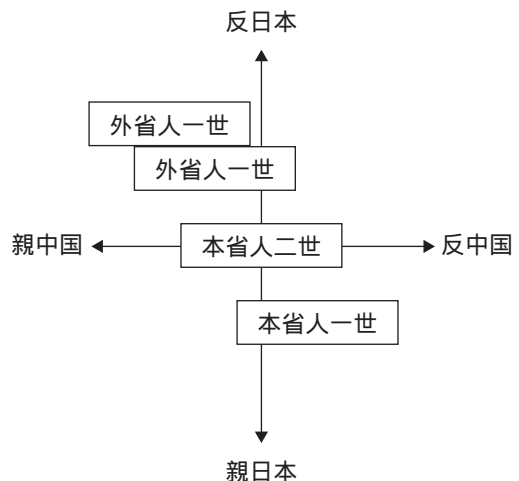
(2)「世代」によって変化する日本像

一世の本省人と外省人はそれぞれ異なる場所で「日本を体験した」が、二世になると、同じ戦後台湾で生まれ育った者として、一世とは違う視点で日本と中国を捉えている。

台湾の社会学者王甫昌は世代別の「対日意識」と「対中国意識」についての書いた論文で、この問題についての図式で、次のように分析している。

90年代以後一世本省人がもつ植民統治期の記憶が公共論壇で再び喚起され、次第に見直され始めた。だが、台湾主体意識の再構築で第一

図2 世代別の「対日意識」と「対中国意識」の内容分布図



出典：王甫昌「民族想像，族群意識與歴史『認識台湾』教科書爭議風波の内容與脈絡分析」，P178にもとづき筆者が作成。

世代本省人の歴史経験は比較的間接的に過ぎず、実際の力となったのは、戦後第二世代の人々であった。彼らは「大中国意識」から離れて、再び台湾の歴史を理解し直し、特に日本による植民統治期に注目し始めたのであった。その結果、第二世代の研究者による台湾の捉え方は、第一世代外省人の中国意識（親中、反日）の考え方も第一世代の本省人が持つ台湾意識（反中、親日）の考え方も明らかに異なっている。彼らは、台湾を主体として改めて台湾と中国、日本の関係を考え、台湾の歴史上、各政権の台湾への貢献と与えた影響を一世代前の評価と対応とは違う立場から捉えようとしている。その特徴は、比較的「客観性」を持って、台湾と中国の歴史淵源と日本統治による台湾の基礎建設（インフラ整備＝近代化）を再評価するというものである³³⁾。

王の分析と見解は『認識台湾』の立場とも類似していて、同教科書の編集審査委員会が次のように指摘している。

教科書を編纂する際に、台湾の歴史発展の特殊性に配慮し、かつ特定のエスニック・グループの立場、或いはイデオロギーから史実を論述することを避け、できるだけ中立的用語をもって簡単かつ要領を得た叙述を行い、台湾の史実に対して簡潔及び具体的認識を生徒に習得させることである³⁴⁾。

さらに、この教科書が3世以降の台湾人に送るメッセージについて、同教科書の日本時代を執筆した国立師範大学歴史研究所の呉文星は次のように述べている。

教科書は、近年の実証的な研究の成果を利用して、日本による統治期の台湾人が一方において植民地統治当局の同化圧力に対抗し、他方においては植

民地当局が導入した近代的なものを、自主的・選択的・積極的に吸収していたことをはっきりと述べている。その目的は同時代の台湾人の適応能力と選択を示すことにあり、日本の植民地統治ないしは近代化に対する貢献を肯定しているわけでも、ましてや「日本に媚びる」あるいは「日本統治を美化する」といったことではない。畢竟外来の統治は台湾人に歓迎され、受け入れられるものではなかったのである。97年出版以来、台湾社会が遍く『認識台湾（歴史篇）』の内容を受け入れ、支持していることは、台湾人が自らの特殊な歴史経験に対して自信を深めていることを示していると言えるのである³⁵⁾。

呉のこの言明は、まさに台湾の日本に対する歴史認識において最も重要な指摘と言える。このメッセージに対して以下の三点を特筆しておきたい。

第一に、歴史認識というのは、まず事実の認識から出発しなければならない。『認識台湾』が出版されるまでに、日本による台湾統治への全体認識はきわめて一面的な歴史観であった。従来学校教育では日本総督府による高圧的、搾取的な植民地観しか語っておらず、日本総督府による「台湾への近代化促進」という一側面も、また一つの事実であるということが見落とされがちであった。しかし、全体的な歴史認識を語る場合、それも欠かせない一要素なのである。

第二に、日本時代は全面的な否定もできなければ、全面的な肯定もできない。つまり、この時代について評価するというよりも、むしろ日本がこの時代に台湾で何を行ったかという具体的な内容に着目すべきなのである。

第三に、真の平和を築いていくための前提として、「過去の克服」と「歴史的和解」の二つが挙げられる。そこで、台湾の義務教育の場で、この『認識台湾』が「日本に対するポストコロ

ニアルな表現」として語られる事には、その意味で非常に意義があると言えるのである。

(3)「エスノセントリズム」的記述から「ポストコロニアル」的記述へ

1994年、作家司馬遼太郎が台湾を訪れた際の、李登輝との対話の中に、このような内容が記録されている。

司馬：「台湾の青年たちと話していて驚いた。小学校や中学校で、中国の三皇五帝から清朝の最後の皇帝までの名前を暗記する教育をやっているようだ。生徒達にこれを全部暗記させても無駄だと思う。」

李：「今は郷土の教育が多くなってきた。台湾の歴史、台湾の地理、それから自分のルーツなどをもっと国民学校の教育に入れようといっている。子どもたちは自分が住んでいるところはどうなっているのか全然分らない。中国大陸のものばかりを教えている。もう少し台湾に対するアイデンティティを教えなくてはならない」³⁶⁾。

この対談から伺えるのは、李登輝政権が目指す台湾における共通のアイデンティティづくりへの試みである。なぜなら、旧歴史教科書で見られる日本像が「エスノセントリック」な記述から「ポストコロニアル」な記述に変化したのは、その3年後だったからである。

『歴史』で描かれている「日本」は、中国侵略という帝国主義の暴力的姿が中心であった。南京での残虐行為及び各地で傀儡政権や、それを利用して中国を支配していくという姿が記述されていた。このように帝国主義者の生々しい残虐な姿を学習する中学生は、恐らく誰でも反日民族感情が煽ぎ起されるに違いないであろう。さらに、こういったエスノセントリックな

記述が、ある意味では、台湾の中学生にとって過去の歴史における被植民地としての体験を克服していく過程で大きな支障となることは想像に難しくない。『歴史』で書かれている日本像に影響され、冷静に客観的台湾植民統治期の日本を認識していくことが困難になるのも考えられる。

もちろん、中国での対日戦争の悲惨さと苦しみは、教科書を通して次の世代に伝えていかなければならないのである。しかし、ここで1つ指摘しておかなければならないのは、この歴史教科書は台湾で使われているにもかかわらず、台湾総督府による50年間の台湾統治についてほとんど言及せず、日本軍の侵略史と国民党軍の抗戦史しか記述されていなかった点である。これは明らかに国民党政権が教育を媒介として、中国史中心主義の意識形成を意図したものと考えられる。同時に、台湾の歴史教育の立場からみれば、日本に関しては極めて不公平かつ不平等な歴史観ではないだろうか。

従って、『認識台湾』で描かれている「日本」は「過去の克服」と「歴史的和解」への試みだと言える。台湾における日本認識は、近現代台湾が歩んできた独自の歴史を振り返えることから始まるのである。つまり、日本による植民統治、オランダによる統治時代、清朝による統治時期、国民党による統治時期と並列に並べて、相対化していく作業の中から、はじめて客観的な認識が可能になるだろう。さらに、国民党による台湾統治の50年間に、台湾が中国大陸から分離した状況で、独自の文化を形成していくうちに、台湾人が「台湾認同」(国民意識)を持ち始めたことによって対日認識が変化したと言える。

おわりに

20世紀初頭、イタリアの哲学者クローチェが『思考としての歴史と行動としての歴史』で述べたように「歴史は、指導者、権威者としての歴史ではなく、人間として、庶民として、普遍的な歴史、共通の歴史として捉えなければならないのである。だが、この部分は常に、権威者によって見落とされてしまうのである」³⁷⁾。

近現代の台湾史に関する記述と解釈の中に、まさに彼が指摘するような歴史認識が照応できると言える。『認識台湾』が出版されるまでの中学『歴史』教科書は、指導者、権威者＝国民党＝外省人としての歴史であり、そこに写されている日本像は終始基本的な立場として、「日本」が中国・中華民族にとって侵略者であり、戦争という残虐な行為を繰り返した、憎むべき「日本鬼」であった。こうした一党専制的政権による歴史解釈の環境下においては、台湾に住む大多数の人々にとって、普遍的な歴史、共通の歴史記述が現れる可能性は望めない状態であった。

日本による台湾植民地統治期の歴史を振り返って再考察する場合、一世本省人による「進歩的／近代的な日本」と外省人による「中国を侵略した日本鬼」という2つの受け止め方が存在している。この2つの情緒構造の差異は日本に対するイメージの落差を媒介として、現在の衝突や矛盾の基盤となっている。

だが、このようなイメージの格差をきっかけとして、本省人と外省人がそれぞれの軌跡として「悲哀の歴史」を相互に確認し、元来の認識上の格差を克服してこそ、和解の起点に向かうことができるのではないだろうか。さらに言えば、植民主義と冷戦構造の相互作用から脱却

し、双方が「経験した日本」における差異を見出すことによって、両者の相互理解を獲得する関係性を構築できるだろう。この和解は、台湾だけの課題ではなく、広く言えば中国、朝鮮半島など東アジアの他の地域においても同様に解決していかなければならない重要な課題であると言えよう。

『認識台湾』は2003年の新年度から全面的に実施される「国民教育9年一貫課程」によって、国定版から検定版とされ、教育カリキュラムから廃止される。これまで「国定」の教科書採用制度を採ってきたことは、一元的イデオロギーの道具になる可能性を常に孕んでいたが、採用の自由化に踏み切ることによって、イデオロギーの多元化を認め、多文化社会の中で台湾が一層活性化することが期待される。そして、台湾社会におけるエスニシティの融合と省籍を超えて相互に尊重し合う可能性の増大に注目したい。

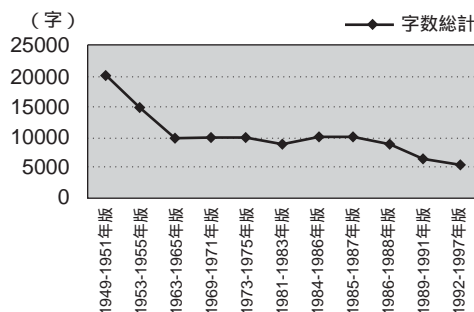
最後に、2003年の新年度から教科書の自由採択の実現において、歴史教育における「対日認識」あるいは「日本像」も現在より多様に変化してくることが予測できる。また、台湾におけるエスニック・グループ間での「対日観」を考える場合、今後、この分野における様々な文献や資料及びその分析結果も、持続的な考察が必要であると考えるので、今後ともこのテーマに注目し、研究を継続していく予定である。

また、本論において不十分であった台湾における「ポスト・コロニアル」問題の理論的解明という課題もまた、呉文星、陳光興等の先駆的研究を参照しつつ、今後重点的に取り組んでゆきたい。それは、このテーマの理論的・実証的な深化なしには、「過去の克服」や「歴史的和解」という一国（国民国家）の枠を越えた歴史

的・社会的認識は表面的かつ皮相なレベルに止まらざるを得ないと考えるからである。『認識台湾』が提起する諸課題は、また「認識日本」さらには「認識アジア」に共通する諸課題と言えよう。

注

- 1) 国立編訳館『国民中学 歴史』第3冊(国立編訳館出版社 1997)。
- 2) 国立編訳館『認識台湾(歴史篇)』正式版(国立編訳館出版社 1998)。
- 3) 図1 台湾中学『歴史』教科書における日本に関する記述一字数総計



- 4) 『初級中学 歴史』1949 - 51年版 第3冊pp77 - 81, 第4冊pp90 - 99。
- 5) 『初級中学標準教科書 歴史』1963 - 65年版 第4冊pp76 - 77。
- 6) 『国民中学 歴史』1969 - 71年版 第3冊p28, 第5冊pp21 - 22。
- 7) 『国民中学 歴史』1973 - 75年版 第5冊p65
- 8) 『国民中学 歴史』1981 - 83年版 第3冊pp19 - 20, pp88 - 89。
- 9) 『国民中学 歴史』1989 - 91年版 第3冊p58, pp77 - 78, p101。
- 10) 『国民中学 歴史』1992 - 97年版 第3冊pp67 - 81。
- 11) 『国民中学 歴史』の本国史は、3冊からなっており、第1冊は1章～8章、第2冊は9章～17章、第3冊は18章～25章となっている。表1は第3冊の内容構成(章立て)を次の通りに掲示する。

表1: 『国民中学 - 歴史』第3冊の構成

章 節	タ イ ト ル
第18章	清朝末期の非常事態
第19章	深刻な外患と民族の覚醒
第20章	新時代の開始 中華民国の誕生
第21章	民国初期の政治局面
第22章	清末民初の社会と文化
第23章	北伐の統一と対日抗戦 第1節 北伐の統一 第2節 10年の建設 第3節 対日抗戦 日本の侵略に対する抵抗 国民党軍による対日戦争 日本軍の暴行 抗戦時期の内政と外交 日本の無条件降伏
第24章	戦後の動乱
第25章	復興基地の成果と展望

(出所: 『国民中学 - 歴史』第3冊の目次を筆者により加工して作成)

- 12) 国立編訳館『国民中学 歴史』第3冊 74頁(国立編訳館出版社 1997)。
- 13) 同p75。
- 14) 同p76。
- 15) 同p78。
- 16) 同p80。
- 17) 同p81。
- 18) 吳文星「台湾の国民中学校教科書『認識台湾 歴史編』を執筆して」(『歴史評論』第632号, 2002) pp14 - 15。
- 19) 表2: 国民中学『認識台湾 歴史篇』の構成(目次)

章 節	タ イ ト ル
第1章	導論
第2章	先史時代
第3章	国際競争時期
第4章	鄭氏治台時期
第5章	清領時代前期
第6章	清領時代後期
第7章	日本統治時期の政治と経済 第1節 台湾民主国と武装抗日 第2節 政治と社会支配 第3節 植民地経済の発展

第8章	日本統治時期の教育・学術・社会 第1節 教育と学術の発展 第2節 社会の変遷 第3節 社会運動
第9章	台湾における中華民国の政治変遷
第10章	台湾における中華民国の経済・文化・社会
第11章	未来への展望

(出所：『認識台湾 歴史篇』の目次を筆者により加工して作成)

- 20) 同p62とp65。
 21) 同pp63-64。
 22) 同p65。
 23) 同p66。
 24) 同p68。
 25) 同p72。
 26) 同p77。
 27) 同pp78 - 79。
 28) 同p79。
 29) 同p62, 66, 76, 85。
 30) 同pp15 - 17, 49。
 31) 若林正丈『台湾』筑摩書房, 2001 p63。
 32) 陳光興「東アジア和解への険しい道(上・中) - 脱植民地化から脱冷戦化へ台湾社会の省籍をめぐる情緒構造」丸川哲史訳(『世界』2002年5, 5月) pp260-270。
 33) 同pp161-167。
 34) 呉文星「台湾の国民中学校教科書『認識台湾 歴史編』を執筆して」(『歴史評論』第632号, 2002) pp14 - 15。
 35) 呉文星「台湾の国民中学校教科書『認識台湾 歴史編』をめぐる」(『現代中国研究』第10号, 2002) p131。
 36) 「対談李登輝・司馬遼太郎 場所の悲哀」, 司馬遼太郎『台湾紀行』(朝日文庫)(1997, 朝日新聞社) p384。
 37) B・クローチェ『思考としての歴史と行動としての歴史』上村忠男訳(未来社, 1988) pp5 - 118。

主要参考文献 (中国語文献)

- 『初級中学 歴史』1 - 6冊 1949 - 51年版。
 『初級中学標準教科書 歴史』1 - 6冊 1953 - 55年版。
 『初級中学標準教科書 歴史』1 - 6冊 1963 - 65年版。
 『国民中学 歴史』1 - 5冊 1969 - 71年版。

- 『国民中学 歴史』1 - 5冊 1973 - 75年版。
 『国民中学 歴史』1 - 5冊 1981 - 83年版。
 『国民中学 歴史』1 - 5冊 1984 - 86年版。
 『国民中学 歴史』1 - 5冊 1989 - 91年版。
 『国民中学 歴史』1 - 5冊 1992 - 97年版。
 国立編訳館主編『認識台湾(歴史篇)』(国立編訳館出版社 1998)。
 王甫昌「民族想像, 族群意識與歴史 『認識台湾』教科書爭議風波の内容與脈絡分析」(『台湾史研究』第8巻第2期, 2002) p161。

(日本語文献)

- 王雪萍「教科書から見る対日認識 中国と台湾の教科書の比較」(慶応義塾大学院, 2001)。
 姜尚中 編『ポストコロナル』(作品社, 2001) p8。
 E・H・カー『歴史とは何か』清水幾太郎訳(岩波新書, 1984) p159。
 B・クローチェ『思考としての歴史と行動としての歴史』上村忠男訳(未来社, 1988) pp5 - 118。
 呉文星「台湾の国民中学校教科書『認識台湾 歴史編』を執筆して」(『歴史評論』第632号, 2002) pp14 - 15。
 国立編訳館主編・蔡易達, 永山英樹訳『台湾を知ろう』(雄山出版社 2000)。
 「対談李登輝・司馬遼太郎 場所の悲哀」, (『週間朝日』1994年5月6-13日) p42。
 陳光興「東アジア和解への険しい道(上・中) - 脱植民地化から脱冷戦化へ台湾社会の省をめぐる情緒構造」丸川哲史訳(『世界』2002年4, 5月) pp260 - 270。
 若林正丈『台湾』筑摩書房, 2001 p63。

(英語文献)

- Joseph Wong, Taiwan: Economy, Society, and History, Hong Kong: Centre of Asian Studies, University of Hong Kong, 1991 pp235-250.
 Teh-fu Huang(黄德福), "Elections and the Evolution of Kuomintang" in Huang-mao Tien, ed., Taiwan's Electoral politics and Democratic Transition: Riding the Third wave (Armonk: M.E. Sharpe, 1996) pp105-136.

A Study of the Japanese Recognition in the History Textbook of Taiwan Compares with “History” and “Recognition of Taiwan”

Zhang Yuan ming *

Abstract: In Taiwan, after martial law was lifted in 1987, progress was made in the movement toward democratization and mainland-izing. In connection with this, reform of history education in schools was carried out to promote mainland-izing and hometown education, centering on Taiwan, rather than centering on the history of China by the National Party Administration. As a concrete step, all first graders will learn the history of Taiwan from the new school term in September, 1997 in the 719 junior high schools throughout Taiwan, using the new history textbook, Recognition of Taiwan. Regarding the period of Japanese government, it is written especially the volume on history of Recognition of Taiwan (others - geography editing and social editing), in detail, and concretely. This textbook, containing greatly different contents from the conventional “history” became topical immediately after its publication in Taiwan. “Recognition of Taiwan” attracts attention in domains such as history and sociology, also in Japan noting that it is the first step toward the Japanese stand historical view reform which leads to “the past conquest” and “historical reconciliation.” Therefore, this paper takes up the old textbook “history” and new textbook “recognition of Taiwan”, and aims to compare the descriptions of Japan in both textbooks, and the image of Japan that currently exists there. In the first and second and chapter, the images of Japan in terms of “history” and “recognition of Taiwan” are analyzed. Chapter 3 considers [from which the difference in the Japanese image looked at by both textbooks is compared, and anti-Japanese recognition came to change] a background. The writer thinks that “hometown” and the “generation” have affected the difference in anti-Japanese recognition especially on the occasion of this comparison. I want to position this paper as a preliminary move towards post-colonial research in Taiwan, and the stage where Japanese stand-related is still newer.

Keywords: “History”, “Recognition of Taiwan”, Image of Japan, Hometown, Generation, Post-colonial

* Graduate Student , Graduate School of Sociology , Ritsumeikan University